

実家・ふるさと

戦況が厳しくなってきた昭和18年6月17日に安達家の三男として生まれました。

戦時中ですから次から次に男子誕生(私の後も弟2人:5人兄弟)に好ましがられたそうです。生れて1ヵ月後に郵便局勤務の34歳の父に召集令状が届き徴兵され、古年二等兵として満州に派兵されたそうです。

父は軍馬の担当だったそうですが、終戦前に重病に罹り内地送還されて助かったそうです。まさに塞翁が馬ですかね。

両親は女の子が欲しかったらしく5番目の弟が誕生するとき、父は今度も男の子だったら名前を「又也:またや」とつけると言っていました。母の猛反対でさすがに又也は取消されましたが4~5歳頃まで女の子に近い育て方をしていたようです。

一番上の兄が小学校1年生の夏、河原(赤川)で遊泳中に溺れて亡くなりました。

私とは違って出来の良い兄だったそうです。私には葬式の一部しか記憶に残っておりません。

父(だだはん)は酒が入ると「安達家は士族で源氏だ」と胸を張っていました。

安達氏の祖、盛長は流人頼朝の当初からの従者で1180年歴史に登場するそうです。

鎌倉時代に源頼朝の家老を務めた安達藤九郎盛長の一派(福島県安達太良山周辺の豪氏)だったようですが確かではありません。一代25年として33代前のことですから気が遠くなります。

母(かがはん)は父がそう言うとき気位だけ高くて(気位だけでは、ご飯は食えない:武士は喰わねど高楊枝)・・・とこぼしていました。幕末までは庄内酒井藩の下級武士だったようです。

生まれ育った鶴岡市は金峯山の頂きから眺めると地形が鶴が羽ばたいているように見えます。

庄内平野の稲作と日本海の北前舟、沿岸漁業で余り目立たないでゆっくりとした流れで独自の

文化を育んできたようです。戦国時代は越後の上杉家の支配下にあり良質な米やお酒づくりの技法が伝承され、北前舟で京都や西国の文化が伝えられて面白い言葉や風習が残されています。

江戸時代に入ってから東北地方に群雄割拠していた外様大名の見張り役として徳川四天王の筆頭酒井忠次が鶴岡に入城し庄内藩を興しました。以来、明治維新まで一度も藩主家が代わることなく

250年間続きました。鶴岡出身の小説家、藤沢周平の小説に出てくる海坂藩がそれで藩内の

権力闘争もありました。質実剛健、文武両道を貫き幕末には江戸守護職を担い戊辰戦争で官軍との戦いでは西郷隆盛軍と会津藩以上の激戦を交え負けはしたものの戦い方が天晴だったということで

藩主の命を西郷隆盛に助けて頂いたそうです。その恩を忘れなかった旧庄内藩士が西郷隆盛と新政府と戦った西南の役で西郷隆盛側の支援に駆けつけ共に戦い戦死されています。

数年前、鹿児島県の桜島を望む城山公園の墓地に赴き庄内藩士の墓碑数体に参拝してまいりました。

明治に入ってから廃藩置県で上杉藩(米沢)、最上藩(山形)、庄内藩(鶴岡)が合体して山形県になりましたが、今でも言葉も風習も違って夫々の地方色を引き継いでおります。

故郷につきましては、この後ご紹介させていただきます。